

精神分析と「聞くこと」

大西 宗夫

(言語表象論コース)

1

精神分析では、患者が話し分析家が聞く。時に分析家が解釈などの形で介入するとはいえ、基本的には患者が話し分析家が聞くのである。分析家の応答は多くは「ほう」とか「うーん」とかいうに過ぎなくても、患者がその声の調子を聞き取って、話の方向が定まってくる。精神分析に固有の話し方があり、精神分析に固有の聞き方がある。患者は自由連想的に話し、分析家は平等にただよう注意で聞く。かつてわたしは「精神分析とパロール」(『人文科学研究』第14号)という論文で、精神分析における話すことについては考察したことがあるので、本論では、主に、精神分析における「聞くこと」について考察したい。

分析家にとって精神分析とは患者の話をよく聞く技術である。分析家とは専門的な訓練を受けたプロの聞き手なのである。精神分析は解釈の技術と考えられやすいが、解釈などは聞くことのあとの話なのだ。フロイトやラカンの精神分析理論は分析家の聞くことを支えるのである。もちろんカウンセリングなどとは異なる精神分析に固有の聞き方があるのだが、精神分析は人の話を徹底的に聞くことであることをまず踏まえておかなければならない。話すことを能動的、聞くことを受動的と見るならば、分析家にはまず徹底した受け身の姿勢が要求される。分析家の能動性や積極性が問題になるのはそのあとのことである。分析家の聞き方とは、一口で言って平等にただよう注意である。分析家は患者の話の特定の部分に気をとられるのではなく、自分の偏見や理論的前提から自由になり、満遍なく注意をただよわせ、患者の話の中にある無意識を聞き取らなければならない。ひとりきりで孤立した人間の無意識を問題にしても仕方がない。無意識は必ず聞き手を前提するのだ。精神分析では患者は分析家という聞き手に向けて話すことで、自分の無意識が明らかにされるのである。話すことは他者に向けて話しかけることであり、分析状況では患者にとっての他者とは分析家なのだ。言い間違いや機知や夢の分析に関する精神的な解釈が行われるのも分析的な聞き方においてである。患者はそういう分析家という我慢強い職業的な聞き手を得て、話すことを学ぶ。日常生活ではとてもありえないほど徹底的に自分の話をする。寝椅子に横たわった患者は背後にいる分析家に向けて、かつてないほどよく話すのである。その過程で自分自身にさえ告白したくないようなこと、それまでは無意識の状態にとどまっていたものを患者は口にするにいたる。自分自身でも予想していなかった話を自分がするのを自分で聞くことで分析経験が成立する。精神分析の中心には「驚き」という感情があるといえるかもしれない。分析を受けていたとき、わたしも分析家を驚かせたことがあった。患者の話に分析家が驚くし、分析家が驚いていることを知ることで、患者自身も自分の話に驚くのである。自分とは異質

な他者が存在するところでは驚きがある。他者はこちらの予想を超えているからである。驚きがないなら他者は消し去られてしまっているのである。患者と分析家はたがいに他者でなければならず、驚きという感情はそれを保障する。ともあれ、そうやって無意識を意識化することによって症状が消えていくというのが精神分析の出発点にあった経験である。それでは、精神分析という場において、患者の「話すこと」と分析家の「聞くこと」が会うのだろうか。だが「出会い」という考え方はふさわしくないで、むしろ出会い損ねるというべきかもしれない。分析家は患者の話を書くのだが、患者が期待しているようには聞かないからである。また患者と分析家は契約に従って、患者は料金を支払い、それに応じて分析家は聞いたり解釈したりするので、二人の関係は社会的な媒介された関係である。患者と分析家の関係は根本的に非対称なのだ。分析家は教育分析を受けることによって自分の無意識について知っており、患者はこれから分析を始めるのだから、自分の無意識について今のところ無知である。あるいは知っていることを知らないのである。分析家は患者の無意識についてあらかじめ知っているわけではない。ただ分析家という聞き手がそこにいることによって、患者が自己発見することが可能になるのだ。分析が終了したら、患者も分析家のように無意識の知を備えるだろう。そうすれば患者は別の人に対して分析家のポジションを占めることができる。あらゆる精神分析は教育分析だといわれるのは、そういうことである。それでは分析家が患者に教えるのであろうか。だが「教える—学ぶ」という教育のモデルは精神分析にふさわしくない。せいぜいのところ患者の自己教育を分析家は手伝う以上のことではあるまい。教育分析は不可能な教育であり、逆説的にのみ教育と呼ばれうる。大学のディスカールとはまったく異質の分析のディスカールが想定されなければならないのだ。柄谷行人は『探求Ⅰ』（講談社学術文庫）において、「話す—聞く」という独我論的な関係を越えたところに、「教える—学ぶ」という関係を設定しているが、精神分析は「話す—聞く」モデルに従うのであり、教育的なあり方はしない。柄谷は独我論を否定的にしか考えていないが、それは狭すぎる見方であろう。永井均がやったように、独我論を肯定的に見ることもできるからである。ただ精神分析は患者と分析家の「対関係」に基づくにしろ、それを「教える—学ぶ」という教育の構図に回収することは不可能であり、「性関係は存在しない」というラカンの言葉は対関係の可能性を否定していることを考慮に入れるなら、一種の独我論を容認することもありうるはずなのである。分析家は教えない。ただ患者の話をひたすら聞く。そして患者は分析家という聞き手に向かって話すことで、自己洞察を深めていく。もちろん、そのためには、分析家の解釈は必要なのだが、解釈は教育ではない。精神分析について考える際に、分析家が患者を教育すると見なしたら間違うだろう。ありうるのは患者の自己教育だけである。むしろ大事なものは患者の側の「自分が話すのを聞く」という独我論的な契機かもしれないのだ。ただし精神分析は自己分析とは異なり、分析家という他者の現前が絶対に必要なので、独我論に閉ざされていくことはない。だが「性関係はない」というラカンの言葉は、独我論の不可能性と不可避性を同時に意味しているとも取れる。柄谷行人の議論ほど単純には行かないのである。フロイトが精神分析を教育や統治と並ぶ不可能な職業と考えたことが思い起こされていいだろう。

2

精神分析には時間が必要である。1年とか2年とか3年とか、あるいはもっと長い分析が行われる場合もあるだろう。教育分析なら数年を要するのは普通である。患者が分析家に自分の話をするのも、表面的なことからかなり本質的な話になるまで、時間がかかるからだ。患者と分析家のあいだに特別な感情的結びつきができない限り、患者は普通は秘密にしておかなければならないようなことを話さないだろうから。ラカンはローマ講演で「パロールにおける主体の実現」ということを言ったが、主体の実現に時間がかかるのは当然だろう。わたしたちが友人や家族と話するときでも、二人きりで話すことが長くなれば、話の内容や形式も変わってくるのは経験することである。時間がたつにつれて、最初には言わなかったようなことが次第に口にされるようになり、心の中のより深い部分があらわになってくることもある。話の深まりは、同時に、二人の関係の深まりでもある。忙しい現代で時間がないといわれるとき、効率第一の要求には精神分析は応えることができないだろうが、一般の人間関係でもたっぷりとした時間に恵まれることは少ない。だがそれは本当に精神分析の欠点だろうか。効率ばかり追求する時代のほうが間違っているのではないだろうか。家族関係や友人関係でも十分な時間に恵まれて関係が深まっていったとき、話をよく聞いていれば、精神的に理解したほうがよいような話題が出てくることもある。言い間違いなどが現れることも珍しくない。1対1のあり方でよく話を聞いたら精神分析における患者と分析家の関係に似てくることはあるのだ。フロイトやラカンの書物は日常的な人間関係に関する理解を深める時にも役に立つのである。人の話をよく聞くこと、そのための耳を鍛えることに、精神分析は寄与しうるだろう。日々の生活においても言い間違いや夢の話を書くことはある。まさか分析家みたいに話し手に自由連想を求めることはできないが、精神分析の理論が参考になるような機会はむしろありふれている。第一、精神分析の基本である自由連想はむしろ患者の側が発明したのであり、フロイトは女性のヒステリー患者の話を徹底的に聞いた男なのである。よく聞くこと、しかも自分の聞いた話に驚くことが精神分析の基礎である。患者の話を既成の知識の中に回収してしまわないなら、患者の話に絶えず新しく開かれていく態度が取れているなら、分析家は驚くはずである。ラカンは驚くことに対して天才的だったのだ。既成の知識の中に安住して、患者の話をよく聞かないような怠惰で無能な分析家とラカンは区別されなければならない。

患者と分析家の関係が非対称的であることについて考えてみよう。わたしと他者のあり方は根本的に非対称的である。わたしという存在は、永井均のいうように「比類のない」ものであり「そこから世界が開けている原点」であり、多くの同類の中のひとつという捉え方で終わりになるような存在ではないから、この世界の中のひとつの存在者にすぎない他者とは、基本的に異なるのである。他者をどれほど重視して考えてみたところで、わたしと他者を同じようなものと見なすわけにはいかない。

ラカンの初期のセミナーの理解によれば、分析家は患者にとって小文字の他者ではなく大文字の他者であるはずだ。イメージ的に捉えられうる2者関係における他者ではなく、シンボリックな3者関係における他者である。嘘をつくことのできるような他者なのだ。分析家と患者は二人

でいるが、契約に媒介された社会的な関係なのでシンボリックなのだ。永井均風にいえば、「そこから世界が開けている原点」である患者にとって分析家は、「そこから世界が開けているもうひとつの原点」（そのような言い方が可能であるとすれば、である。正しくは不可能であろう）であるような他者である。だから当然、到達不可能であり認識不可能である他者なのだ。ただ承認することが可能だけである。患者が自分のイメージ界に回収できないような他者でもある。転移とはその回収不可能な存在である分析家をなんとか回収しようとする努力かもしれない。

患者は自由連想法にしたがって話すわけだが、頭に浮かんだことを取捨選択せずに、そのまま話すというのは精神分析に固有の話し方で、いわばヒステリー者的に話すということである。日常的話のつながりはそれによって壊される。筋道立てて要点を簡潔に話すことから自由連想法は遠ざかるのである。むしろ思いついたことをできるだけそのまま口にするのを求められるので、自由連想を経験した人は、話し方や文体に対する自分の価値基準が変わってしまったことに気づくかもしれない。学校という制度が要求している話し方からは逸脱しているのが、自由連想である。話すことはそこに現前している聞き手に向けて話すことだから、構造的に他者をはらんでいる。聞き手が不在ならば話すことはできない。独り言（モノローグ）になってしまうからである。分析において患者は分析家に話しながら、その自分の話す声を自分で聞くことが重要なのだが、それも分析家という聞き手が現前してこそである。分析家に話しかけるときに、自分が話すのを聞くのであって、たんなるモノローグとしての内的な音声の経験では精神分析にならない。また自分ひとりで自由連想的に書くことで自己分析する人もいるが、精神分析とは患者と分析家のあいだにおける「話すこと」と「聞くこと」の交差する経験だから、自己分析は精神分析ではない。患者が他者である分析家に話しかけるという契機がどうしても必要である。患者と分析家の関係の上に展開する転移の分析があってこそその精神分析だからである。無意識的なものを言語化することで神経症の症状が消えるのは、その言語化が「話すこと」＝パロールだからであって、エクリチュールでは精神分析と呼べない。パロールは聞き手が現前して、その聞き手に向けて話すことであり、そのとき同時に自分が話すのを聞くことであるが、エクリチュールでは自分ひとりの作業で他者が不在だからパロールの場合のような転移が生じないからである。対話である精神分析に比較すれば哲学はモノローグ的であり、精神分析がパロールに基づくのに対して文学はエクリチュールによるといえる。分析家に分析を受けるのを二人の人間のあいだの性行為にたとえれば、自己分析とはオナニズムのようなものである。精神分析を自己分析として理解してしまう人はオナニスト的なものかもしれない。だが自己分析に比べれば、実際に分析家のもとに通って精神分析を受けるのは、費用もかかるし時間もかかるから、多くの人が面倒なことを避けたい気持ちも分かるのだが、自己分析は精神分析ではないことは言うておかなければならない。分析家という専門的な訓練を受けた職業的な聞き手に向けて話すのは決してむだな経験ではない。断っておくが、モノローグが無意味だと言っているのではない。ただ分析は患者と分析家の緊張をはらんだ対話的な経験なので、自己分析のようなモノローグとは異質だと言いたいだけだ。自己分析はむしろ実際に精神分析を受けたあとでやっと可能になるともいえる。だからまず分析家のもとに通うのが始まりなのである。

文学者のような書く人にとって、書くというのはどういう作業なのか、書くという行為において他者はどういう意味をもっているのかは興味深い問題だが、エクリチュールは他者を排除することで成立しているのではないかという危惧を感じる。文学は精神分析に近そうで案外遠い領域かもしれない。精神分析が他者に向かって開かれた領域であるのに対して、書く人は他者を消し去ってしまっているのだとすれば、精神分析のパロールと文学のエクリチュールを隔てる距離は大きい。今現在わたしはこの文章を書いているのだが、目の前の人に語りかけるパロールと異なり、他者が不在の中で書くことは空しい気がしないでもない。文学者とはむしろ他者を厄介払いして、自分ひとりの世界で書くことに喜びを感じる空想的な人たちではないかという一抹の怖れを感じるのだ。繰り返すが、それがいけないと言うのではない。ただ精神分析はどうしても分析家という他者を必要とする経験だから、文学とは異質なのである。

3

患者が無意識に抱いている空想があったとする。原光景でも誘惑でも去勢でもいい。たとえばある男子患者が「女性にもペニスがある」という無意識的空想を持っているとしよう。彼は性生活に障害を抱え込んでいるかもしれない。その患者が分析家にする話の中で無意識のうちに女性のペニスが繰り返し話題になるだろう。母親がペニスを持っている夢を見たと報告されることもありうるだろう。ただ患者と分析家のあいだで対話が成立しているなら、患者が女性のペニスについての空想を持っていることがあらわになるにつれて、空想は空想として自覚され、やがて捨て去られるだろう。無意識的空想は意識化されれば消滅し始める。パロールと空想は完全には共存できないからだ。パロールは社会的なあり方であり、空想は自閉的なあり方だから、自分の空想を分析家に話すことで意識化していくと、空想は揺らぎ始めるのである。患者が話をし分析家が聞くという精神的な関係の中では、空想の問題がやがて処理されていくのだ。もちろん空想を片付けるのは容易なことではないので、長い時間のかかる仕事である。ラカンが分析の終了を「空想の横断」として捉えたことから分かるように、分析において空想の問題は最重要な課題のひとつである。もうひとつ、空想のよく知られた主題として家族小説がある。たとえば、ある男性患者が、現実の貧相な父親とは別のある高貴な男性を自分の真の父親であるとする無意識的な空想を育てているとしよう。患者の家族小説は、分析の最中にかすかな空想として語られたり、言い間違いによって明らかになったりするだろう。だが空想があからさまに分析家との話に出てくれば、やがて修正されていく。誰が彼のほんとうの父親であるかは、空想にもかかわらず、彼自身がよく知っていることだから。空想はパロール化されることで、現実検討と接触するようになれば、消えていかざるをえないのだ。精神分析においては、患者の基本的空想が発見され意識化されていく。それまで知られていなかった無意識的空想が明らかにされて、消えていけば、患者は変わっていくだろう。空想することにともなう自閉的なあり方は分析家に話すことで開かれていくからだ。容易なことではないが、分析はそういう方向へ進むだろう。自己完結していた存在に開口部が生まれるのである。精神分析の治療効果があらわになる瞬間かもしれない。

精神病者はコトバの世界に生まれ落ちていない、本質的な意味では話さない存在だといえる。

精神病者には他者が成立しておらず、一種の独我論的な世界の住人であるから、他者を必然的な契機とするパロールが欠けているのは当然であろう。大文字の他者とはパロールの場所であり、他者を「そこから世界が開けているもうひとつの原点」と見ることができて初めて、その他者の観点から逆に自分自身も多くの人間のなかのひとりとして把握することができる。そうして話すことが可能になるのだからである。精神病者には大文字の他者が欠けていて、小文字の他者しか存在していないなら、話すという事態が不成立だというのも理解できる。本質的な意味で「聞かれる」「耳を傾けられる」ことを経験していないのだろう。

話すことは単に他者に向けて話すことだということにとどまらず、他者からの応答に出会うことである。他者はいつもこちらの予想を超えた思いがけない応答をしてくる。そこに驚きが生まれる。話し手は他者の応答に対して開かれていなければ、話しているとはいえない。他者の応答に対して閉ざされているなら、それはモノログであろう。他者に向けて話す、自分が話すのを聞く、他者の応答に向けて開かれている、という条件をかなえて初めて「話すこと」＝パロールが成立しているといえる。そしてパロールにおいては、主体は自分が言ったと思っている以上のことを言ってしまうので、その剰余分が無意識なのである。ランゲージュが無意識の条件であるとはそういうことである。他者が無意識の条件であると言ってもいい。だから精神病者はパロールを欠いているのであり、無意識が正常に機能していないのである。分析家の解釈という応答によって、患者の内的ディスクールは根本的に変化することになるのであり、そのことが治癒をもたらすのだが、そのためには患者はまず応答に対して開かれた存在でなければならぬので、転移の可能性のない精神病者の治療は神経症の治療とは別種の困難に出会うにちがいない。

自我とはイメージ的な対象であり、ヘーゲルの主人と奴隷の弁証法に見られるような、相克をはらんだ2者関係において問題になるものである。自我は他我との関係そのものである。完全に孤立した自我は考えられない。自我があるなら、他我への関係が潜在しているはずである。自我というイメージ的なものにとらわれている限り、コトバは自由にならない。自我はコトバの通行を妨げる障壁のようなものだからである。いや、コトバとは常に主体の自由にはならない領域で、主体こそ逆にコトバのようなシンボリックなものの効果＝結果なのだが、分析によって自我のようなイメージ的なものを還元することでパロールの通過を容易にすることはできる。分析家のパロールが主体に届きうるためには、自我のイメージ的な関係を超越して行くことができなければならないのだ。

自分自身を多くの人間のなかのひとりの人間と捉えうる能力はパロールの能力の前提でもあり結果でもある。『これがニーチェだ』（講談社現代新書）の中で、永井均は、相手の立場に身をおいてみるような「相互性の原理」を道徳的なものとして否定しているが、それはコトバそのものへの批判であり、コトバの外へ出ようとする衝動のようなものである。人間をその独在性において見る彼の独我論哲学は、ある意味では精神病的なのであり、この社会において普通に通用する言説ではありえない。人間が社会を構成して集団生活しているところではコトバはなくては済まされないので、相互性の原理も当然必要になる。だが人間をどれほど社会化して考えようとしても、人間のうちには反社会的な孤独が残されるので、永井均の独我論も一面の真理であることを

やめないのだ。人間は社会学者が考えるほど社会的な生き物ではない。ラカンが人間を「話す存在」として言語的に捉えるとき、人間をその社会性の面から捉えようとしているのに対して、ニーチェや永井均のように相互性の原理を否定する見方は、人間を精神病患者のような言語外の「話さない存在」として独在性の状態で見ているといえよう。ラカンの見方とニーチェ的な見方のどちらが真かという問題ではなく、この世界における人間のあり方の総体を捉えるためには、両方の見方が必要なのだ。人間存在はほとんど社会的・言語的に理解されるが、社会や言語からあふれ出てしまう剰余を持つので、ラカンだけではなくニーチェや永井均が必要になる。自分を多くの人間のなかのひとりとして把握する能力はパロールの前提をなすと同時に、パロールの結果でもあると述べたが、〈わたし〉は多くの人間の中の単なる一例ではなく、永井がいうように「比類のない存在」でもあるから、パロールの外部の可能性を考えてみなければならない。神経症の外部には精神病がある。ニーチェや永井均の認識は精神病的であり、その意味で神経症的なもの外部なのだ。神経症的なあり方においてコトバがすべてだとはいえ、精神病的なあり方を考慮に入れるならば、コトバがすべてではないと言えるかもしれない。あるいは日本語という言語においてはイメージ界（想像界）は十分には去勢されないと思われる。ラカンは音読みと訓読みの問題を指摘していたが、日本語という言語では、去勢されきらないで残る想像界がある。主体が抹消されきらないと言ってもいい。ラカンの理論はフランス語の話者の分析に基づいているので、日本語の話者では事情がことなることはありうるだろう。またヴィトゲンシュタインが「語りえないことについては沈黙しなければならない」と言ったように、すべてを語るができるわけではない。ラカンの言語を絶対化する見方はフーコーやデリダにも見られると思うが、わたしはそこに一種の時代的な限界を感じないではないのだ。構造は主体を規定する。主体は構造の結果なのである。だがデカルト的に言って、構造を疑うとき、その疑うわたしが存在することは疑えない。その主体もさらに構造に規定されているというなら、その構造をも疑う新たな主体が存在することは疑えない、と言うように、構造を中心に見る立場と、主体中心に見る立場は最終的にどちらが正しいというわけではなく、決定不可能であり、どちらも成立してしまうのだ。デカルト的な「わたし」はいったん成立してしまうと、もはや還元不可能なのである。だから両方の視点を考慮に入れなければ十分ではない。

4

柄谷行人はプラトンの対話篇をモノローグ的といったが、哲学がモノローグ的だとすれば精神分析は対話的なのだ。ただ分析を対話と呼ぶとしても、独特な意味での対話であって、患者と分析家の非対称的な関係に基づくのである。他者に話しかけるためには、他者を〈わたし〉の到達しうる向こう側で「そこからも世界が開けている原点」として捉えることができるのでなければならない。つまり大文字の他者が成立していなければ、パロールは不可能である。それでは聞く方はどうだろうか。話し手は「そこから世界が開けている原点」だろうが、話し手にとって聞き手は「そこからも世界が開けているもうひとつの原点」という不可能なあり方をしていることになる。だから聞き手と話し手のあいだには深淵が口を開いているので、容易にコトバが通過

するはずがない。性関係は存在しないといわれるような事態があるのだ。

聞き手である分析家は患者のパロールに対して開かれているだけではなく、自分の心の中の動きに対しても敏感でなければならない。分析家は教育分析を受けることで、自分の無意識について知っているはずなので、患者の話の聞いているとき、自分の無意識に開かれていることもできるはずなのだ。患者の話をよく聞くといっても、分析家は無我の境地になるわけではない。分析家は自分が「世界がそこから開けている原点」というあり方を喪失してはならない。

寝椅子に横たわった患者は背後にいる分析家に話すのだが、患者は自分が何を話しているのか自分で知らない。分析家にも最初は分からないだろう。意味が生じるのは事後的にである。話＝パロールは時間の中で現実化するのだ。はじめのうち患者はうまく話せなかったり、空しく雄弁だったりするだろう。ラカンが「空虚なパロール」と呼ぶようなものである。それに対して治療効果を生むようなパロールをラカンは「充実したパロール」と名づける。患者は分析家にコトバを届けるために、「うまく話す」(bien dire) 努力をするわけだが、自分でも何を話しているのか分からない状態でも、やがて充実したパロールが通過することが可能になる。型どおりで一般的な空虚なパロールと治療に有効な効果を発揮する充実したパロールを区別するのは、意味深い言い間違いだったり、現実的な経験には必ずあるはずの具体的なディテール(細部)を含んでいるかどうかだったりする。記憶の喚起に情動を伴っていることが大事なのである。ひとつの言い間違いが患者の無意識の根底に光を投げかけることがあるだろう。患者の話のなかで情動を伴い一般論には解消できないディテールが姿を現すときも、パロールは充実し始めるのだろう。ラカンがいうように、最初、患者は分析家に向けて話しているとき自分の話はせず、自分の話をするときは分析家に向けて話さないのだが、次第に分析家に向けて自分の話ができるようになれば分析は完了する。別のところでラカンは「空想の横断」をもって分析は終了すると述べているが、まったく別のことというわけではない。精神分析は患者が抱えている基本的空想の発見を課題にするが、空想から覚めれば分析家という他者も発見されるので、改めて分析家に向けて自分の話をすることも可能になる。患者が話すとき、その話の中には当然、空想も現れるので、分析において無意識的な空想を意識化することは大きな仕事なのである。

分析家は「聞く存在」である。分析家という聞くことに徹している存在と出会うことで、患者の話すこと＝パロールは新たな次元に向かう。治療において効果を発揮するような充実したパロールに患者が到達しうるのも、分析家の聞く能力に大きく依存している。普通には聞くことは単なる受動的な行為で消極的な意味しか感じられないかもしれないが、そうではなく、聞くことは偉大な技術でありうると理解されれば、精神分析の存在理由がのみ込めるだろう。患者として分析家の所に通い、寝椅子に横たわって自由連想法にしたがい話すという経験をしたことがある人は、分析家が背後で黙って聞いているだけみたいなきときでも、ある仕事がなされているのであり、聞くことの上でなされる解釈がなくても、聞くだけでも十分に分析家は意味のある存在だということを実感するだろう。聞き手を得て初めて患者は話すことができる。以前に書いたことがあるように、1回50分の分析を50回受ければ2500分のあいだ、100回受ければ5000分のあいだ、患者は話す主体になるのであり、それも分析家という専門的な訓練を受けた聞き手がいればこそなのだ。

話すことが同時に自分が話すのを聞くことでもある以上、話す主体とは聞く主体でもある。患者と分析家の双方にとって、聞くことの威力が分析経験なのである。

柄谷行人は『探求 I』で、「話すー聞く」は結局のところ独我論に帰着するので、「教えるー学ぶ」という新しい関係が見いだされねばならないと述べていたが、永井均も言うように「教えること」は教育学的暴力に他ならない。だからむしろ独我論を積極的に評価して、「話すー聞く」関係を見直すなら、精神分析には新しい可能性があるとも考えられる。少なくともラカンの理解された精神分析は、教えることにまつわる教育学的な暴力から自由でありうるので、依然として精神分析は貴重な経験であることを止めないのではないだろうか。

分析家から離れてひとりになっても、患者自身が分析家との対話を取り込んだような「自分が話すのを聞く」態度を維持できて、分析を受けることで構造的に新しくなった自分の内的ディスクールや言動に対して絶えず分析的な自己観察ができるようになれば、分析は終わっていいのだが、そういう観点からすれば、自己分析とは実際に精神分析を終了した人にとって初めて可能だと言えるかもしれない。だからまず分析家のところで寝椅子に横たわって自由連想することが必要なのだろう。精神分析を受けるのはある意味では一生に対して影響を持つような経験であって、わたしが自分の受けた分析の効き目をひしひしと実感したのは、分析が終わってから十数年たってからである。だから効率本位の現在ではそんな悠長なことを言うてはおれないということであれば、精神分析はすでに時代とはあわない古臭い方法かもしれない。だがフロイトが創始し、ラカンに引き継がれた精神分析の経験は、少なくともわたしにとっては、依然として貴重なものである。分析家に聞かれることでわたしが話したこと、そして自分が話すのを聞いたことで、決定的に変化したものがわたしの中にあると信じられるから。分析家という聞く人に出会うことによって、わたし自身が聞くことを学んだ。聞くことを学ぶことによって、同時に無意識について学んだ。それがわたしにとっての精神分析である。

5

デリダに音声中心主義批判という考え方ががあるが、エクリチュールを称揚し声を貶める哲学とは逆に、精神分析ではほんとうに声が大事な主題である。文字の視覚的イメージから解放されて、自分の話す声を聞くという聴覚的なありかたを獲得することで主体は自由を得る。ある意味では症状とは音声化されたことのない文字であり、イメージ的なものへのとらわれであるから、その無意識を音声化して意識化することで、症状が消えていくのである。自分が話すのを聞く主体が成立し、同時に抹消されていく。聴覚が視覚に対して優位に立てればいいのだ。デリダの主張に反して、人間のうちではつねに視覚的なものが圧倒的な力をもち、聴覚的なものが確立されていないのであり、精神分析はその徹底的に聞く姿勢で、患者のうちに自分の話す声を聞くという聴覚的な世界を樹立することで、症状に打ち勝つことができるのである。ある意味では、精神分析ほど音声中心主義的な経験はないだろう。その中心には分析家の聞くことがあるのであり、その聞き手に向かって患者は語るわけだが、文字と異なり、声は実際に相手に会って直接話さないのだめだから、時間と場所と費用の制約がある。文字の方を好む人は分析家に会いに行くのが面倒

だから、自己分析に走り勝ちなのだろうか。時間と費用の条件をクリアして精神分析を受けることができた人は、かけがえのない経験をするだろう。だが多くの人にとって精神分析が書物の上の知識にとどまるのも止むを得ないことかもしれない。だが言うておかなければならないが、精神分析とは知識などではなく実践なのだ。ある生々しい経験なのだ。万人向けではないとはいえ、少数者にとって精神分析は当分の間存在しつづけるだろう。精神分析はまだ終わっていないのである。

ラカンの好んだフロイトの言葉に「エスがあったところに、わたし（自我）が到来しなければならない」（Wo es war, soll Ich werden）というのがある。精神分析において分析家は患者の欲望に耳を傾けるから、患者は分析家に話しているうちに、自分の欲望に対して以前よりキッパリした態度が取れるようになる。「わたし」の語る事が次第にエスに近づいていくことで、自我の自己欺瞞が捨て去られ、自分の欲望に正直になれるのだ。自分の身体の語る声を聞き取り、やがて自分の欲望を生きていく勇気ももてるようになるだろう。そのとき患者の内的ディスクール、「自分が話すのを聞く」ことは神経症的な性格を脱ぎ捨てて、エスに忠実になりうる。内的ディスクールが新しくなることは、心理的な事実にとどまらず、「わたし」という存在自体が別のあり方に変わることの始まりである。生活の現実の中で自分の欲望を率直に行動として展開していけるなら、神経症からの自由を獲得したのであり、精神分析は有効だったのだと言えよう。葛藤や分裂から免れて、自分自身の欲望を生きていくことができるのは、必ずしも幸福を意味しないにしても、肯定されていい本来性ではないだろうか。精神分析は聞くことに徹することで患者の欲望を解放するのである。ある意味で神経症とは自分に正直になれない無意識の臆病さだと言えないことはない。患者が分析を受けることであるがままの現実を直視する勇気を獲得し、抑圧のようなメカニズムを克服することができるなら、神経症は治るだろう。精神分析はそれを手伝うことができるかもしれない。『カルチエ・ラカン』（*Quartier Lacan*, Flammarion）という本の中でシャルル・メルマンが「飾ることなく、隠すことなく、（自分の）欲望を表現する可能性」（p.114）と言っているように、分析を受け終えた人は以前に比べて自分の欲望を率直に表明できるようになるのは確かだ。それだけでも精神分析には存在理由があるに違いない。分析家はあらかじめ分析を受けることで、明確になった自分の欲望を持っているから、患者の欲望を聞き取ることが可能なので、分析家の欲望に導かれて、患者も自分の欲望に対して自覚的になるという風に、分析は欲望をめぐる展開するのである。話す主体である患者は精神分析を通して欲望の主体として確立される。「欲望の法」とラカンが名づけるものに従って生きうようになれば分析は終了してもいいのだ。分析は「聞くこと」に始まり「聞くこと」に終わる。「聞くこと」の威力がすなわち精神分析なのである。

後記　精神分析を受けていたとき、わたしが見た夢の話をする、分析家が「奥さんはなんと解釈していらっしゃいますか」と言ったことがある。わたしが妻に自分の夢の話をするとき、妻が見事に解釈することを分析家もよく知っていたからである。ただそのときは夢を妻に話していなかったの、「妻には話していません」というと、分析家が「それは残念ですね」と言って夢分

析が完了しなかったことがあった。フロイトやラカンなど読んだことがなくても、生まれつきと言いたくなるくらい、無意識に対して敏感な人はいるものだが、妻はそういう人のひとりである。そんな妻との日々の対話によって支えられているので、わたしは自閉的にならずにすんでいるのだと思う。単なる自己分析に堕さず、精神分析について考え続けることが出来ているのは妻のおかげだともいえる。感謝して、ささやかな本論を妻・温子にささげたい。

